

第 25 回杏林医学会 秋季市民公開講演会

認知症の新時代

— 最新治療・予防と共生社会の実現に向けて —

2026 年 10 月 10 日(土) 10:30～12:30(開場 10:00)

杏林大学三鷹キャンパス 第 2 病棟 4 階 大学院講堂

プログラム

10:30-10:35 開会あいさつ

司会：亀山 祐美 先生

杏林大学医学部総合医療学・高齢医学教室 教授

10:35-11:10 (11:00-11:10 質疑応答)

認知症の予防・新しい治療

演者：亀山 祐美 先生

杏林大学医学部総合医療学・高齢医学教室 教授

11:10-11:40 (11:30-11:40 質疑応答)

認知症を画像で見る

演者：須山 淳平 先生

杏林大学医学部付属杉並病院放射線科 教授

11:40-11:50 休憩

11:50-12:20 (12:10-12:20 質疑応答)

認知症とともに生きるまちをめざして -三鷹市の条例と認知症施策-

演者：青山 純一 先生

三鷹市健康福祉部高齢者支援課 課長

12:20-12:30 質疑応答・閉会あいさつ

司会：亀山 祐美 先生

杏林大学医学部総合医療学・高齢医学教室 教授

認知症の新時代 -最新治療・予防と共生社会の実現に向けて-

杏林大学医学部総合医療学・高齢医学教室 教授
座長：亀山 祐美 先生

認知症医療は近年大きく進歩し、アルツハイマー病に対する抗アミロイドβ抗体治療やアミロイドPETなど、新しい診断・治療が実臨床で活用され始めています。本講演会では、これらの最新医療と認知症予防の最新知見をわかりやすく紹介するとともに、認知症になっても安心して暮らし続けられる「共生社会」の実現に向けた自治体の取り組みをご紹介します。認知症の有無にかかわらず、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせる社会について、一緒に考える機会となれば幸いです。

認知症の予防・新しい治療

杏林大学医学部総合医療学・高齢医学教室 教授
演者：亀山 祐美 先生

アルツハイマー病の診療は近年、大きな転換期を迎えています。これまで認知症治療は進行した症状への対症療法が中心でしたが、病態そのものに作用する抗アミロイドβ抗体薬が実用化され、早期診断・早期治療の重要性がこれまで以上に高まっています。本講演では、アルツハイマー病の病態をわかりやすく解説するとともに、抗アミロイドβ抗体治療の適応、期待される効果、安全性、当院での治療を受けるための流れについてご紹介します。

一方で、認知症対策は治療だけでは十分ではありません。2024年に発表されたLancetでは、認知症の発症リスクに関連する修正可能な危険因子として、難聴、高血圧、糖尿病、肥満、喫煙、身体活動不足、うつ病、社会的孤立、視力障害、高LDLコレステロールなど14の因子が示され、生涯を通じた予防の重要性が改めて強調されました。認知症の発症は完全には防げない場合もありますが、生活習慣や健康管理を見直すことで発症リスクを低減し、発症を遅らせる可能性があることが明らかになっています。

本講演では、最新の科学的エビデンスに基づき、食事、運動、睡眠、社会参加、生活習慣病の管理など、今日から実践できる認知症予防について具体的に紹介します。また、治療と予防は対立するものではなく、両輪として取り組むことが重要であることをお伝えします。認知症になってからの医療だけではなく、認知症になりにくい社会、そして認知症になっても安心して暮らし続けられる社会を実現するために、一人ひとりができることを考える機会となれば幸いです。多くの方々に認知症医療の現在と未来を知っていただき、健康長寿の実現につながる一助となることを願っています。

認知症を画像で見る

杏林大学医学部附属杉並病院放射線科 教授
演者：須山 淳平 先生

認知症は高齢化に伴い患者数が増加しており、早期診断と適切な治療につなげることがますます重要になっています。近年ではアルツハイマー病に対する疾患修飾薬の登場により、認知症の原因となる脳の変化を画

像で評価する画像診断の役割が大きくなっています。

認知症診療では、それぞれ異なる特徴をもつ画像検査を組み合わせで診断を行います。MRI は脳萎縮や脳血管障害、正常圧水頭症などを形態的に評価する検査です。アルツハイマー病では記憶に重要な海馬周辺の萎縮が特徴であり、VSRAD®を用いた画像解析により海馬周囲の萎縮を客観的に評価することが可能となり、診断の補助として広く活用されています。

脳血流 SPECT は脳の働きを反映する血流分布を画像化する検査です。アルツハイマー病やレビー小体型認知症、前頭側頭型認知症では、それぞれ特徴的な血流低下のパターンがみられます。さらに、3D-SSP や eZIS などの統計解析画像を用いることで健常者データベースとの比較が可能となり、視覚的には分かりにくい血流低下を客観的に評価できるため、早期診断や鑑別診断に役立っています。

アミロイド PET はアルツハイマー病の原因物質の一つであるアミロイド β の蓄積を直接可視化できる画像検査であり、アルツハイマー病の診断精度を高めるだけでなく、疾患修飾薬の適応判定に必須の検査となっています。FDG-PET は通常は腫瘍の診断に用いられますが、脳の糖代謝を評価して神経細胞の機能低下を捉えることが可能な検査です。

MRI、脳血流 SPECT、PET など認知症診療で用いられる代表的な画像検査についての特徴や役割を、それぞれ実際の画像を交えながら解説します。

認知症とともに生きるまちをめざして -三鷹市の条例と認知症施策-

三鷹市健康福祉部高齢者支援課 課長

演者：青山 純一 先生

認知症は、誰もが自らのこととして向き合う可能性のある身近なものであり、認知症になっても希望を持って自分らしく暮らし続けたいという願いは、多くの市民に共通するものです。令和6年1月には、認知症の人を含む一人ひとりが個性と能力を発揮し、互いに人格と個性を尊重しながら支え合う共生社会の実現を目的として、「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が施行されました。三鷹市においても、令和6年4月に施行した「人権を尊重するまち三鷹条例」の理念にのっとり、令和8年4月に「認知症とともに生きるまち三鷹条例」を施行しました。これまで高齢者計画の中で位置づけてきた認知症施策を踏まえながら、条例の趣旨を今後の計画や取組に生かしていくこととしています。

認知症を、医療や介護だけの問題ではなく、地域とともに暮らす私たち自身にも関わる身近な課題として捉え、認知症に関する正しい理解、早期の気づきと相談、本人の意思決定支援や社会参加、家族等への支援、そして地域でできる見守りや声かけについて、三鷹市の取組を交えながら説明します。

三鷹市では、高齢者なんでも相談センターをはじめとする相談体制、認知症サポーター養成講座、認知症とともに生きるまち三鷹ガイドブックの活用などを通じて、本人や家族が不安を抱え込まず、必要な支援につながるための取組を進めています。また、認知症の人の意思や持てる力が尊重され、本人が地域の一員として経験や個性を生かしながら、自分らしく暮らし続けられるよう支える視点も欠かせません。

そのためには、医療や介護、福祉の専門職による支援だけでなく、日常生活の中での気づきや声かけ、地域の交流の場、身近な人とのつながりが重要です。認知症の人の意思と尊厳が尊重され、住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるまちに向けて、「認知症とともに生きるまち三鷹条例」の理念と、三鷹市における認知症施策の方向性について紹介します。

演者紹介

亀山 祐美

【専門分野】 老年内科、認知症、性差医学・医療

1998年東京女子医科大学医学部医学科卒業、同年フランスストラスブール大学病院神経内科留学、東京大学医学部附属病院老年病科入局。2022年同病院認知症センター講師、2025年内閣府健康・医療戦略推進事務局参事官補佐を経て2026年2月杏林大学医学部高齢診療科・もの忘れセンター臨床教授（現在に至る）。

須山 淳平

【専門分野】 画像診断全般 特に核医学

2001年昭和大学医学部卒業、2005年総合南東北病院放射線科、2006年昭和大学医学部放射線医学教室院外助手、2008年同教室助教、2012年講師を経て、2014年湘南東部総合病院放射線科診断核医学部門部長就任、2015年湘南医療大学保健医療学部教授、2019年杏林大学医学部放射線医学教室准教授就任、2025年杏林大学医学部付属杉並病院放射線科臨床教授（現在に至る）。